

# 1目覚め

これから長久保赤水（以後、赤水さんと呼びます）のことを書きます。と言ってもげげんに思う人もいるかもしれませんので、長久保家の一族で、「地政学者 長久保赤水伝」（暁印書館）などの著書も多い長久保片雲（本名・源蔵）さん（89）（89） 高萩市に語ってもらいます。

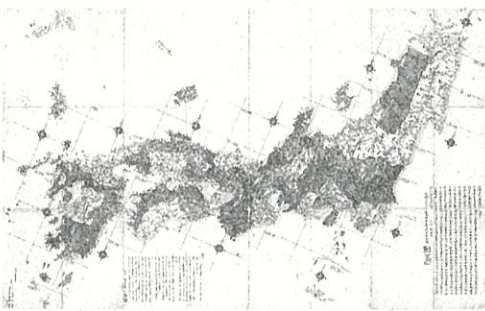
「彼は通称を源五兵衛といい、農民の長男として今の高萩市赤浜で生まれ、35歳ごろから日本地図を作り始めた人なんです。彼が作った地図は、当時としてはもっとも信頼され、ひとびとに愛用されたんですね」農民の子ながら、ひとびとに愛用される日本地図を作った人が茨城県にいたなんて。赤水さんってどんな生い立ちなのか、とつても気になります。

西暦で言えば江戸時代中期の1717（享保2）年11月、当時の常陸国赤浜村で生まれます。彼は虚弱児だったらしく、早くも医師からこう告げられたというんです、「この子は40歳まで生きられないだろう」と。ところが実際は数えて85歳という長寿を全うされたんですね。けれど、不運な少年時代を過ごします。

## 父母他界 不運な少年時代

8歳のとき弟を亡くします。翌年に母のおしげが亡くなり、その2年後、今度は父の善次衛門が亡くなります。彼は11歳で肉親を失ってしまっただけです。

特に母の死は彼にとつて大きな衝撃だったに違いありません。と言っるのは、母から文字の読み書きを教えられたことで彼の知的欲求は芽生えたからです。当時は紙も貴重品。なので母は



伊能忠敬の地図より42年も早い1779年に完成した「改正日本輿地路程全図（初版）」  
高萩市歴史民俗資料館蔵

丸いお盆に載せた白い砂に指で文字を書き、我が子に伝えたのです。赤水さんもひとつ覚えると次が知りたくなり、好奇心をどんどん深めていくのでした。

「なにしろ夕立がきても庭に干した麦を取り込むことを忘れるほど読書に夢中だったので、父親にこっぴどく怒られたくらいなんですよ」（片雲さん）

もともと生家は庄屋でしたから村政に携わる関係上、読み・書き・そろばんができなければ務まりません。けれど母の死で文字を覚える手立てを失います。ここで彼を救い、後々まで支えたのが継母のおかんでした。

父の善次衛門は妻を亡くした翌年、おかんと再婚します。しかし、その1年後、今度は善次衛門が亡くなります。おかんは実父から「離縁して実家に戻れ」と告げられます。おかんがこれに従えば、赤水さんは



晩年の長久保赤水を描いた肖像画＝  
県立図書館蔵

まったくの孤独。けれどおかんは勇敢でした。実父の言葉をきっぱりと拒否したのです。幼い赤水さんを残して実家に戻るといって、そんな薄情にはなれなかったのです。以来亡くなるまでの約25年間、おかんは赤水さんとともに暮らします。（フリーライター・岡村青）

この人物の生涯を岡村青さんがゆかりの人や土地を訪ねて紹介します。岡村さんは真壁町（現桜川市）生まれで、「血盟団事件 井上日召の生涯」（三一書房）や「十九歳 テロルの季節」（現代書館）など著書多数。

連載は原則木曜日に掲載します。

伊能忠敬（1745～1818）が全国を測量して作製した「大日本沿海輿地全図」より42年も早く、農民出身の長久保赤水（1717～1801）は、収集した様々な地図と旅人らの情報を元に、当時としては最も信頼性が高く、利便性に優れた「改正日本輿地路程全図」を完成させます。